

卸問状答書 第一卷 春部

和書門  
二七九六七  
八六七  
五冊 函 號 類

内閣文庫  
和書  
二七九六七  
三五  
一函 冊 架  
三冊 架

内閣文庫  
番號 和 27967  
冊數 5 ( 1 )  
函號 184 35

184-35

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

御問状答書

第一部

秩  
文

卷  
上

明治十三年購求

184-32

正月

門松

護士にも不殊相立て市町を

修験醫者の数の子山諸村にてハ寺社

或ハ役人或ハ鳩王郷士杯の子孫百姓

の長さる者為思ひくに仕ハ大抵松に

竹二本を横に渡し注連たひく讓系

種も大根昆布神る篠炭蠟檜の系号を

飾りハいハひ木ハくぬきハの刻木三本

つハをハひくぬ木ハ方言志木とハ

にまゝ社家るとに櫛木をさして門徑と  
稱しゆも此座の飾りか家づくは詳略  
ありしゆ一は大同小異にて格別の事な  
り座の畧しゆ家にも立砂にてもこの  
松をだしゆもさしゆ立砂のさし仕ゆも  
さしむるの小家にも立砂さへも不仕  
いかし十し七八に座の大概言宗  
の家ハ物具ハり門徒宗の家ハ粗略に  
ゆ内何事も不仕ゆ家多くゆ松立てゆ

十二月廿六日除ゆハ正月四日ゆ除ゆ  
時末をさしお取て後ハ立無きゆお門  
松の注連を猫被せ熊引た甲ゆ垂れゆ  
葉玉て楯く人のお入を妨ゆ故中より  
引わけ両方ハ結らせゆ松ハ家により  
必五蓋をさしゆを司みゆも座ゆ  
松立ゆより多くハ偽尾の出入を忌こ  
ゆ故松さしゆをさハ不來ゆ一は山伏被  
神のまじ扱を配ゆハ元より仕ゆ

蕨民將來之札之事 村里により稀なり  
此札の長さ寸六七分幅二三分内に  
秘符あり卷封して表に蕨民將來子  
孫と尸文字の座の法園宮天王社或ハ  
其言ちと里交来り門ふも張るも佩  
此或ハ疫病流行の時の蕨民將來子  
孫と家と尸の小札を製し張り此も此  
書又別にさふ三八宿と書いて門へ  
さういふ書も此座にて疱瘡の呪と尸

是ハ玉て稀此或ハ痘瘡いすこ不仕  
此兒としい家ハ主兒の名をかき某  
と留ると尸札をとり或ハ草鞋を造り  
門に納り此括のりも此座い  
鏡餅あり 年注神ハ勿論先祖の位牌武  
家ハ武具所家ハ帳面并宗旨の本  
言胡大黒里正ハ其村の御圖帳そ外職  
分付平生あり此神并取扱の器め一もお  
付一尸の餅と一重にて上に飾り餅とて

拍子木を薦く傳信の物赤小豆餅六枚  
白餅六枚凡十二枚を井桁の如くをさ  
中へ橙を攀け之外裏白讓系の乳門松  
に傍り山ぬき拍子木をさへ山後神大神文  
に供へ山ハ大にして物備はり余ハ候  
候小豆を略し山鏡餅贈り山を親類  
或ハ契約の家師家等此山産山是もさへ  
お同銘此産山家内にて銘くに鏡に  
きかうむふと尸るハ此山産山貴人

にハちいりるの之承り山  
屠蕪いり 号長よりも年少よ也も始山  
子村により家により山主人男子皆上下  
妻ハおかけを仕山屠蕪ハ紅囊を製し  
て盛置し除板井中の水際へつる一元  
朝未明若水じゅう山寸とり上て酒中  
にいれ山或ハ餅と米とを井筒へ供へ  
山もろい山かゝる子なる年男仕山凡  
國々人々存山て載る不不及いりも可

有し山一其他山にてのありて不中し  
由一書出し申し事下にも可多し  
此類大福と云ふ一茶と柿を給ひて  
家々の事或ハ蒼木を門前にとせし  
人も此世し

組重し事 内尋の外芋昆布人參焼豆腐  
等も用みし  
雑煮し事 塩斬塩鯛まき鏡もちめ焼豆  
腐大根お茶の類を餅の上におき上盛花

羹<sup>カン</sup>おとも唱へ多くハ味噌まれ小醬油小  
ても仕し田作ハ七器いれ向に付し大箸ハ  
檜栗ちにて何うに造りも仕多くハ  
市にて買取し

久佐村古屋谷と申すハ粟餅を湯小  
いれ煮立てし時淡路島うさしと唱へ  
家内一同神を祈りて後たへし

年注柳し事 薪の刻本を用み米菜の繩  
おて組し天井より縄にて釣りて之上を中

幣をたてし八年は神外に伊勢の大麻をも  
張りつけいて饗餅檜無鯛串柿神酒於  
明の敷を借へし元方棚と申して年々方角  
をかへしもあらし又常の神棚に筵を張り  
上下に竿を架し注連を引き与方小松  
餅を檜等を立て注連に昆布標串柿根引  
松神馬藻の敷を下げしもあらし雉鴨つく  
こ又狩に木孫二三尺文饗餅を掛しも  
あらし之上に扇と三本



如け仕り左右

に傍りしもあらし又一本を并き天井に  
帳をふらふく掛しもあらし大棧胡大黒云  
がきし粗扇の度此敷亦あらしの例詳畧  
一板ありしをい

垂筵と申して入口あたりにき筵を張り  
しハ内をく治めると申呪又ハ籠抱乃  
えしやうにとて十五日迄仕し或ハ簾  
を下けしもあらし上山村と申に元の必  
馬碛木をたてしハ爆奏りまあしあし



すえ又煙多く家内く詠むと申すの他

申

元方余いり 元方あき方いりる神社  
一詣り尤阿き方にて直達に神社無し  
多そ二三里をうりの所まで余詣仕り  
もろいり一たこれハ稀にて一宮へ余  
いハや、多くい多くハ氏神墓下且那  
寺へ余いのい大抵三日内にて定りも  
申す

餅花いり 柳の枝に餅を付けむの如く

に見へい 或ハ葉に付いも申す  
い申す申す申す

破魔弓は木板 羽子板ハ大抵いつくも

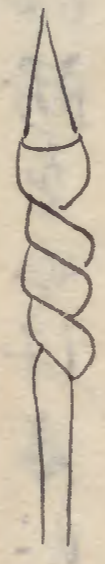
同し申すに申すい やられも小女子阿る  
家へ通敷ようおくりい つく時うけと  
めい敷をいいゆあうい やよう扱と  
かうへ一人にても三四五六人阿つま  
りてし仕りこれを法けを夏になり 故



をよして指圖仕らせしを交射すけし  
をき俵と申五度を五俵と申子とり  
と申しおまかこの子一人或は二人  
を俵方へとり申し七俵負れし何れ  
勿こまると申してか此破魔にて負し  
子のひをとり廻しし十俵すけしへ  
と其子に野堂をねさせし之上負  
して彼一方をすれしかれす主逃廻  
りしをれを進<sup>進</sup>かけとらへるとして

破敵仕し勝負に勝をわけしにてハ  
云水坐の上手ある童子ハ投しを勿  
しやうと地に落ししを射何てし  
多矢ハ之る兎輩製し女并或ハ刻  
舟の強きをもち用わ長さ三尺斗棉弓  
の弦をかけたし矢ハふをとりて矢  
の羽をとりささくおはる出の之矢れ  
根ハぬんトやかうまう二色<sup>色</sup>被治に  
つくり賣し緝のそめ苧にて矢根

をゆきこれと根あきしと尸式ハ古き  
 烟管の吸口をまきしきうきし、も  
 用る尸此亦近村変しにハ葉を小  
 き圓空の六とく仕りこれを投て射  
 以変もきし向長谷下お井るト尸机  
 にハ升を輪に仕り射尸又犬猪と  
 中てこれもけ弓矢にて犬を射残れ  
 以るも所産山祢人一矢ハ左の通  
 所産山



山南近村をゆき図





子供遊、羽子板を匂る寶引等の外  
 紙鳶をともま、つゝ揚るゝめあまり  
 をもはき、戸外宿市十六板中、ひそ  
 も仕、松葉かんと、とて、門松の葉  
 を隠し、ち女の通り、以て、投かけ、  
 或ハ葉を三つ組に、て、女の尻を、お、  
 敷色く、市庄、ハ、鞆津、ハ、元旦、と、三日内  
 小兒、泣、う、い、て、町中を、何、と、き、  
 と、宵に、限、り、  
 又、鬼の、血、と、  
 一童鬼



とるうて條の童を捕へ此四うて捕へ  
られたる者を又鬼と定め此前に鬼の  
四ハ幾四六四七四八四杯云詞多し又  
柄切と申て鎌を土に横し一たて少し  
遠方より錘を投て強の柄をさうゆ又  
子を買ふと申るるし其詞に子を買ふ  
て何くもそ伊勢領隊にと、のま、そ  
一て杯中詞の座ゆと、ハ魚ま、ハ飯  
子に此座ゆ或ハ蛙を少殺し車前草に色

ハ蛙履ハ死よやつとおる此履ハ吊ひ  
にこ申て土をほくくとた、きしゆハ  
蛙癒り此柱のりも仕ゆ外に石かくし  
右きりこるるこそふさりと尻かつけ  
かくれんほうさんそりこ杯一一申上  
ゆに不堪ゆけさんそりこハ鞆鞆と尺  
ハ鬼四以下ハ四月を必とせまゆ凡  
鬼我五十年前無比ハゆも悪託ある  
遊いハ次子にわしゆ方より座ゆ

元日寺社に一年の事をまゝい吉函を  
占ひぬ祈る本店と戸所に除夜より氏  
神へ余儀仕り社人より其年の米の  
麦の豊凶早澇の事とも神託として申  
する事い以下加茂と申す二日に氏宮  
にて祈禱仕ぬこれハ五月九月も同様  
に申す一以外申す不申す  
賣初の日今曉市中子供小陶利を持  
て歩洒造家へ集り泉と唱へ門の戸を

打た、き前後をあゝそい阿くるを  
待て買申す第一小を鏡餅并に祝儀  
として錢をき一三ハ追々畧し申  
す其外諸商賣々物と申す申す  
人へ少く宛祝儀と申す申す  
二日掃初より二日をふ待元日より  
仕ぬ初一をき二をき福をく述べ幸  
よく扱と申す奥へをきいれぬ家も治



望む式と伺つきそめ系川そめ等のそ  
らろくそそ又家により天秤打そめ湯  
つうひ初と、中も此座より皆  
年男仕ひ仕方小何も異振のそ言内座  
此の繩より初と中て大るる草鞋の  
片足を半分分海とつくりかけお牛の引  
繩握子の緒を綯いたる神棚一供一ひ  
又小鉄初と中も仕うひこれハ十一  
日とにハ必鉄をつういひそ有ひひ

六の日先をいあひ具方畑を漱にて穿  
ちそあへ小き松を立て小き幣を茅と  
つけてそつきにして其めくりには茅を  
筋のめくり其さきをわり四角なる紙  
をささく月乃敷たて酒を祭りひ白つ  
き初等或ハ吉日をも元ふひひこの時  
揺ひ末を初へ供へ米をたくそへ置  
て田植に田神をまつお飯に仕ひ家も  
の座ひ

三日うまい神松ちや一考その人にて  
仕ひもまゝ家この例ハ詳るゝ以多く  
ハ五日に寺子屋の謡初そ外浄瑠璃三  
弦等そ好この人中合て仕ひ可も此座  
以一此例と申すハ此座ハ山村に茶  
筧の謡初と申事此座ハ其文句鄙俚甚  
しくい  
門松をさる日の子 大抵四日に以一此  
宗例にて七日十五日とまおき此音木

を十五日の粥の薪に仕ひ家もまゝ又  
門松を田植の薪に仕ひも此座ハ  
三日吉書初ハ元日にも仕ひ通例めてた  
ま詩歌等の外天筆和合樂寿福園笛樂  
るいとか詞をもかきい讀書初そ外諸  
職等の子始通例にて奇事も無い  
船乗初しり今曉市中子供多勢連立  
船そちの宅へ集り運賃と申い一バ  
詩かゝつゝ紙に摺り祝儀として出

一中山官船も来その内座の  
親族往来も尤當日に子限十日以て  
に思ひくお仕の或ハ年既日と申日を  
極めを諸方一執之日に集りて家も  
往々に内座の其外節振舞と申て親姻  
朋友なとも報き雑煮は飯等おし  
せちかんと申してせちハ鮎飯羹ハ雜  
煮の事には春野路を歩けハハ夫  
ハ物をき荷に有い片荷ハ小児か荷

ハ候ふけををのせ妻を先におて往  
拜仕の人に度々逢下ハ三方に紙と種  
考をしき上に米をのせ上に伊勢海老  
於密楫榎搗栗とつり葉鬼の豆柿昆布  
ほとくハ田作等をのせゆる客阿れを  
前へ出しお礼を仕のハ直に川中ハ  
これをも三方ととるハ田島横島な  
と申急にハ禮者此米をこし斗をこり  
喰ハ富士家にてくいついと申すハ

下け米を十五りの粥に入れの家もは  
せし九年程ハ遠方にて一宿を不仕  
一宿をれハ苗の尻不泥うつくとて  
きういひり山村の百姓は役人者と  
一年改に余ハ時紙を前にのせ出ハ  
丈と申主人必人ハ一酒を出ハ是を  
かん酒ハ申し亦も所産ハ山村の婦人  
ハ必うちかけめきハ上着を仕ハ綿帽  
子をいハきハ帽子なき者ハ手拭に

ても取にをき入に急ハ申かん酒の  
かんも蒸おのかんにハ哉凡村民其ハ  
裸冬ハ片むくても守取箱ハ不仕ハ者  
元日ハハ羽織不扇を仕ハ来ハ為休  
者松ハ親の名て来る所慶ハ形ハ中後  
向のさう田又ハハ椀飯の名ハ城中のこ  
にて民庶にハ云ハ申

四日お家社人山伏等今日今年礼に  
出申山新山福盛寺と申のこ三日に

法城寺村門田と中家へ年礼に参り  
五日に門田寺へ参り例の座に其寺  
の年内餅をつけハ必火災多しゆに  
て元日と餅を拜る不中五日に門田  
餅を持来りてより始て餅を佛にも  
大をな一申し  
餅の山入りと申て餅部つかききつ  
一人つ、持り山神に修へ本を荷宛  
この餅をい何きいハけ時取ぬりい

木を門松と云ふにどり墨田粒の時  
の薪に仕仕  
同の元節より三箇日迄の神前の供  
物をひとつお仕り煮て給申し是を  
福つかしと申し町家には親属  
より焼く山鏡餅をいしき盛き餅あ  
ふれ等なきり年中の菓子るとに阿  
下餅へ来り除元にとふい山鏡餅の  
臺を今日返し申しこれハ注連を今

日お詠し此にちりい左方ハ鏡餅を  
十日にお詠し多くハ朝十一日の  
雑煮に仕い

五日ハ初日三日の末とく祓棚一供  
物等仕りせらも同前にてこれを五  
箇<sup>カシ</sup>りと申此日壇濱を働き山人不  
殊をあへつとひ高主上下にて鏡餅  
一重を由一持出た場あ一汐をさし  
汲入いの餅をそるへそのち高主宅

にて雑煮ゆをおし肴ハ向さる貝の  
吸お一種にて振舞仕い

六日明けを七の酉月と申あそり  
を自越と申して常をそるへ申町  
家ハ小麦飯をたきおめ粥汁に海  
苔大根の細く切にちをいれ芳飯汁  
と吸へ飯角あ申し丸菊に豆切を  
添甲いそるち左方にハけり左くい  
明りの料に若菜をちやし何ちひい

唐土の鳥と日中鳥と松尾一山也  
此座の道々ハ庖丁共那箸杓子之類  
七種にて乃、き立尺ハ是も不仕ハ  
家多きかよにハ七草の汁を爪につ  
けて爪をとれそ一年中爪を日に  
えふふに不及とも中ハ

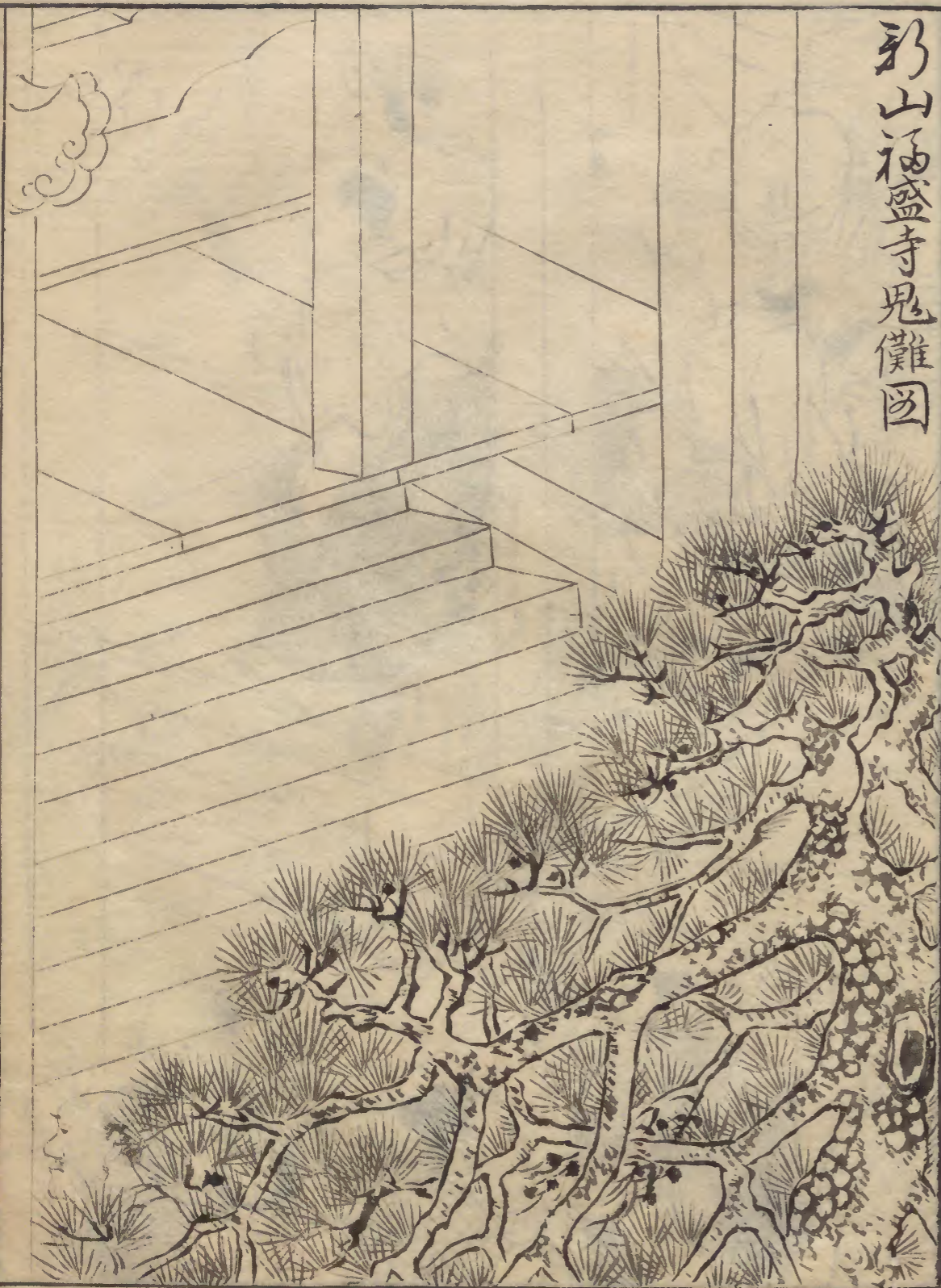
七日七草を雜炊に仕り節ハ三日五りと同  
扱にハ座ハ

此ハ深津村薬師寺と申に法流七箇

寺集り多進新禱仕ハ村役人桃の枝  
をもち考とかけ追拂ひハ其似を仕  
ハ能登系と申にハ氏宮の卜此演  
にて弓を射りハ新年極月十日神主  
より氏子二人を定め日日汐こりを  
とりかのいささせ此ハ麻上下にて  
各八度つ、射させハ田嶋と申に  
ハ九日に大法ると思へ射手十二人  
氏神庭中に十五層に的をつくり矣

數千百五十二射中し組合何りて尚  
 當を定めお供多し納中しこれを  
 百子祓ると申し  
 新山村福盛寺に  
 鎮守熊野権現あり其象今りと九月  
 九日二度に所住の僧徒經よこし半  
 に鬼二匹おしし男鬼ハ前年九月尚  
 當の者女鬼ハ今日尚當の人に比か  
 の鬼堂の内にて袈束作り男鬼ハ赤  
 面赤衣木綿の衣黄色に黒筋を引き

新山福盛寺鬼儼圖







席皮の志とく下に同くき袴を着し  
 女鬼ハ面白くゆきて松明とほし  
 堂の西よりおて堂の椽を三交旦う  
 けへハ氏子の入堂の角に松明を持  
 ちみその処にて合せ火と中るを仕  
 け其火ハ庭へ投棄ゆその火燼を村  
 児とせぬぬう痘の呪にや一又軟啼  
 の呪をしていゆ怪おハうて氏子四  
 人内一人渡金の鏡を折三人橙木の



杖にて板の間にたきき鬼を追ひい  
は時半玉をいふおを出し満人うけ  
かへりゆえしめ役人の寺よて酒肴  
馳走仕い肴ハさんややく牛房等七  
種に限る杯も七ふいひし  
十一月鏡拜ハ子の異子言し町家ハ四  
日あし仕い多くハ時取所ハ今般雜  
煮に仕或ハ焼いて雜煮ハ仕いもろ  
堂上登りハ元日に同りくハあふ  
い

時焼きいを焼初と申して先だ  
も有いハ方言きりひふきいを  
と申い  
花開いり市平家により二月又ハ三日  
西日の内に仕り餅酒をそるハ  
い産い  
農商ともに帳の上書いし  
給申を帳祝ひと申寺子丸手  
初水師家に糸い素讀初ハ今日

仕比 比日 謝初と申て 於七つより  
をきかして 牛を引て 田に 新き牛に 田  
を三交をうせ 下男ハ 三畝つゝ 田を  
うろ 田植 款をうゝ いかへり 申し 田  
西て 神に 醴を 供へ 犁にも 謝にも それ  
くハ 糸ハ 醴ハ 除取につく ぐろ 六えを  
きし 此れを 福ある 申し 此 於山 伏牛  
の 給を 配り 申し 村も あり け日 農人  
四月と申し 申し 横嶋と申し

に 大玉 祝と申て 漢船 網引組の 者  
を 網主の 宅へ よい 振舞 申し 大玉ハ  
網の 浮けにて 桐の木を 丸く つくり  
申し 網主の 信し 申し 神名 あり 葉つけ  
申し 申し 平村と申し 申し 申し 申し  
必前 祭をかどし 祝ひ 申し 萬能 倉  
と申し 申し 早朝 凶村 あり 毘沙門 庵  
と申し 申し 福を とうに 切り 申し 餅と  
かん 采りと 持り 檜の小枝を 紙小 由

きたるをうけ取り、後ハ苗代にて  
山人、各取り、肉に<sup>に</sup>白紙おまひ  
し枝を、いし、一ハ、えりきて福なりと  
中い

十四日道祖神祭、宮内村と中に神  
酒を供へ町あよりも、余山人、坐山外  
にハ、逢う、不甲山左義長にぬさ袋を飾  
り付い、変山座山、近年はや、い、山へ丸  
これ、道祖神祭の、あこり、おま、やい、鏡

左義者、い、り、とんど、中、城下町、十ハ  
い、より、子供集り、あ、この、注連繩、松飾を  
お集めい、玄、後き、若、歩、掛ひ、大竹、四本を  
七八分の、お、まて、繩にて、巻、立て、上にて  
合せ、い、め、ま、とい、ひ、裙を、四つ、足に、開、き、た  
てい、是を、山と、中い、その、中へ、臺、輪と、中、地  
を、い、れ、足を、か、こ、め、枝の上を、餅を、落、し  
の、注連にて、巻、い、を、下、注連と、唱へ、それ  
より、上、注連と、中、て、新に、造りい、注連を

巻きの其注連のとまり此所へ松の小  
枝にて大四のかさちる敷めを作し竹  
のまといひ束祿する処を襦の如く貫す  
此古來ハこれをつつ川ふぬき三蓋と  
とるし今ハ一蓋の之に似し一かやも  
う三蓋と申し又棚と申す前の方に造  
る若し是へ歳注の札幣吉書のかこ  
杯付申し右三蓋と申す松より上に饒  
うを付けま上に筥に短冊扇やうの扱

と毛付申し饒うと年々思ひ付きし品  
或人多獸草本あやしの器物までも多  
を費し作籠まこと葉細工に棚饒うの  
具を白く一青赤の紙金銀箔などをも  
もちりまめつくり立てし申し大小教凡  
三四十位年により増減あり焼捨し  
るや一人物より里を忌みし十三日  
またおハ饒うつけ揃ひ十三日十四日  
と市中を舁き出りし十四日申の刻に

至り本店村前地と中へ持おて火をの  
多をゆーすのけ村とんとや左義長や  
明年もござれやと人こをゆーゆ一  
焼くを多やとすの節小餅を竹に  
挟みす火よて焼き丸返り人こをこ一  
つ、給いて祝すゆーす村富士前  
して素方の人火氣の間群集の中へ馬  
を弛せし左方にも町め多る変あを三  
つ四つ二つ仕の知もゆさゆまとい葉

ハ猫福と中厚き物にゆたかやす村  
却て目さあーゆ書すめ此書を竹に  
流け此火の中へゆれゆてす燼紙の空  
へ何う置ひる高けれを融寺にるると  
懐ひすの猫福を年徳柳門松の上にも  
流す福まると左義長にも用ひる製少  
かつ、黄うゆのこにゆたや一終うて  
ゆうゆ後町毎に家々不難の祝紙を  
合い社人修験等こ人と一祝詞を上ゆ

福山左義長図

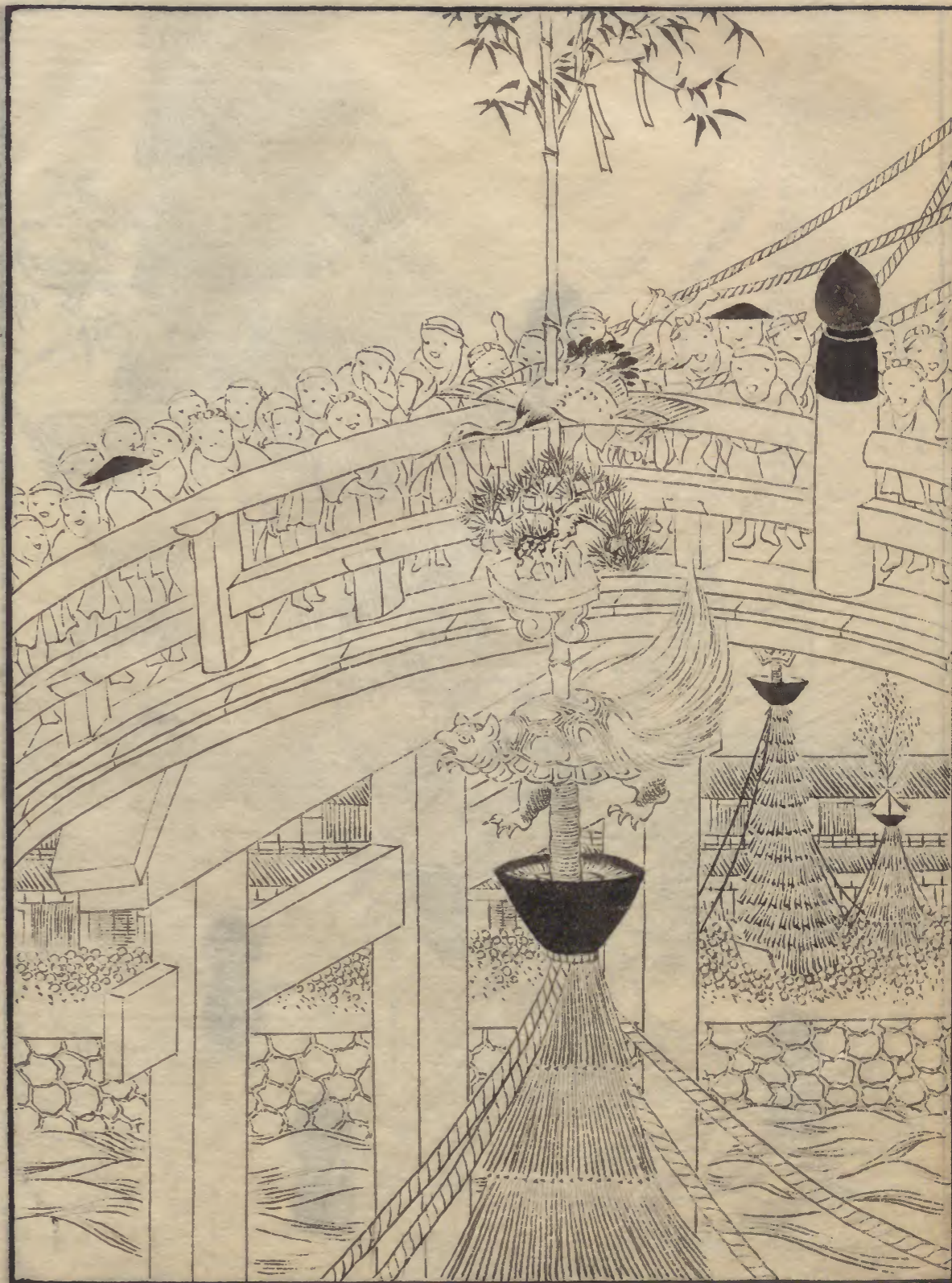


村の神酒を十五日に到り平山又と人  
 と竹のやけ焚りを家々一分歩き一  
 を灸筋に仕山山村ふる門松に添へ  
 竹神棚花はると飾り山味をしり縄  
 にてまごひ焼くゆて一同にとんとや  
 いえいろうやいとひのかきハを船ま  
 て赤小豆餅ハすへつたとかふひ唱へ  
 山方角ふようとなへひるハあそりい  
 一古吉きいせ四被佛神の札ありやご





山子ハ異あるも山ひみろふハひみ  
 つてふときこ江山方角も所産ハ一  
 わかりふ中ハ祠に山瓦十四日に仕  
 るハ多クハ除夜に仕ハ式ホて除夜ハ  
 いそり山く山好いつの山より今日  
 にかハ山除夜に豆腐てんかくを必給  
 山を十四日に仕山山もろく左山均を  
 左長を爆竹佛正月ハ鬼祭のかさり  
 可有所産山也



削かけし子 藩士の家にはある表裏に  
その門松にて仕ゆもきし又山入の時一  
尺計に木をさう皮をみつに削りかけ  
ゆも有しゆへ共締るるうにゆ産ゆ  
京都祇園社のりつうけと申扱ふ事  
ハ其ゆ産ゆ 此意にて承り不申  
まゆむの事 此意にて承り不申  
今日を佛正月と申新に餅をつき菟  
藪焼豆腐等の意法を承りて持佛へ

此供へゆ黄粉餅赤豆餅にも仕ゆ 此  
新日言傳目待五九両月も同扱に仕  
ゆこよひ左方にまどろへんと申  
流石の糸ゆ乞食扱の若木にて作ゆ楸  
斗の如きちある扱と錢さし少くそへ  
十五で持来仕うと治へんと治へんと申  
ゆへハ内より此料に仕かまへ星ゆ  
圓子餅或ハ錢をもきくゆ額を隠  
しゆ故凶年ハ貧民もあきれおゆ

よー義笠着しゆもろこ葉細工の馬  
に浅そへゆもろこ近年次茅くにな  
くなりゆ

十五日多くハ白粥赤豆かゆをも仕ゆ中  
に榎橋栗をいれゆ不も有い又今日の  
粥人日の雑炊おも餅をいれゆる粒と  
となへい赤もゆ粒ゆ藪に煤拂の箒を  
焼そへゆ不もろこ大搥粥ハ三方の米  
を用るゆ

種ためしとすて茅小稻及菽麦種等  
の名をかきゆ札を洗けそ種を粥に  
ひさしと上にありぬを洗け焼灸  
の串なるふ苞ふと一たる形の如く  
して釣をきその重くたれゆ穂の札  
をえて某の稻某の種を今年とくこ  
のるとゆそれを多くうへゆ稲に  
上房店六豊後小玉なと種に大わこ  
小わこきりゆ好と雑穀にもいろく

の各色をいし山故にいし或ハ香木を月  
の敷ふさう粥の下へたきそへ火に  
あうい時をさこころ十二吸にあらふ  
へ灰色白きを照り月黒きを雨月半  
分白きハ半月ふて晴雨をわかちい  
村にもいし詳に仕い者ハけり初  
て太箸をやめ第の箸にて喰そめ後  
ハ平生の箸に仕い又け日の粥を箸  
にかけそして啜りいへハ苗代よ高

の啜むうれひありとハ如もいし  
又粥を七朝にしてそふい一椀に  
一給いへそ復病ふ仕とて給いそ  
い此日ハ言僧村祈禱とハ仕  
い村もいしいと移にいし  
大のこんこういし此字に承り不中い  
若餅いし今日搗いそも石くいし  
大掛佛西月とて十四日につきいし  
わかもちとハい

卯杖卯榼いす。此意に承り不すい

此日暑付と申て子供過く一葉う橙  
を二つに割濁事をぬりて隠しそち  
往來の女の顔にぬり付りしるは産  
ひ

十六日卯日いす。俗家にを吾の産ひ正  
月七月の十六日に香ををるるへ漢獵  
の人ハ其業をやめい  
此日の養父入ハ農家も早春日く閑

隙也へ此日を定てハ不仕町家そ外  
在方もても早春多用の家ハ仕中  
ハ 髪結職の者ハ休りと申けり髪  
結ひふりし七月も同するにハ

此日夷講いす。胡祠ありし町々ハ社前に  
神樂を奏し尚書の家何りて清中集り  
酒盛杯仕し十日に仕しもあるし五月九十  
月も仕し左方もあるし一丸略に内産し  
此日を土穂正月と申秋の土産れ也

を粉にいしつゝ黄粉をつけしと社に  
も供へし又麥正月或ハ春日正月  
とハ必麦飯をこへし如も佛社へ團  
子と供へし如も所産の  
萬歳之歌いする 春駒大黒舞夷旦糺曳は  
さふ摺四つ竹笠是ハあき郷ハ他はよ  
り糸ひて大抵多しハ糸舞の体にかゝ  
太夫とハ者か付えほしに大紋幸<sup>サイ</sup>舞<sup>サイ</sup>  
若とハ供人の赤ときとの赤中ると着

一鼓をもちいで舞ひし政にふかの幸  
舞かとし吐ると仕ゆこれも大同小異  
大抵いつ國も同じく尺へし糺引ハ糺  
を負ひて農おへ糸ハ或ハ馬屋の祈禱  
とハ糺をつれ糸り塩をふり何々吐へ  
いて烏帽子を着し帯をかかけ糺を引  
ゆ人の画をそりつけし糺曳に改とハ  
そのまゝ有地とハ村に居ひて衆祖公  
を支配仕ゆ此との護主の馬の祈禱を

仕山耐ハ正五九月帯剣袴にて廐へ出  
て第四本馬の繪圖四枚指上例として  
唱へしりうきくを詞部徑あるはへそ  
り各は座の鳥追ハ桑笈とも太鼓を打  
廻り山の之大黒舞も既中を著し槌を  
あり且し大馬と申ハ此かひの人ある  
以杯いふ詞にふしをつけ唱へし  
此月神事之事 各日の下に附徑仕山外  
初日より三日まゝ一に宮吉備津彦明

神山内陣子て中臣祓多し四日山禰の  
以明と申り座の社家等且り里出  
仕し神酒を頂戴仕り是を祓り始と申  
以牛玉加持と申る供僧と申者麻上下  
又一人士烏帽子白袈束にて牛玉の印  
をもちお殿ふたろ四方をおし南に向  
いて又三お仕り中柱へ飛上りて印を  
押ししかか仕り三度同じく祓あ  
右左此柱へまゝ三度つゝおるし仕



さて神前大庄へより卯木の串牛玉  
紙をささみを敷十五内陣へ投げられ同  
所の柱一も又三度飛上り印をたし  
是時内陣小浩若山社僧小司大床係へ  
おて臥上へ布を押され山宮座座ると  
中りの大床にて同じ事仕り事終りも  
牛玉紙一枚つゝ右人数一配り一人扱  
殿下り供僧中へも同じく何と一  
新始と申ハ松丸を三本を横に一本豎

に二本並き三大工と申もの一人ハ大  
鳥帽子白装束二人ハ士鳥帽子淺黄装  
束にて三釘をうち山は時神前より三  
方三つさす一つハ鏡餅三重一つハ土器  
一つハ同縁三枚のせ大工一おし一彼  
丸太一餅をさる一神前いさき同縁  
一枚つゝ廻りて退出仕山三大工と  
申ハふるく傳さう山末役にて只々に  
て造作るといふはぬの大工を用

みよぶ

一宮正月吉所之事

一絹 千匹

一金 千兩

一田畑 千町

一銃 千駄

右者任先例為後日如件

寛永三年

正月吉日

右の目録如此

又三方の祈禱と申す西座の諸司僧  
 神子系人四十人悔ふれを勤めの中臣  
 祓をよむ拍子木を相圖と申す神子殿に  
 て神子神系を奏し系所にて樂人左鼓  
 をうち伶人舞臺に出て太平樂を舞ひ  
 偽造観音堂にて誦經仕い今時樂する  
かたえつ七日に弓始何り早且所  
むかりにい司皆く神子殿へ出て各其席にて破酒  
 をいよき時一人白木の弓控の生  
木をけ

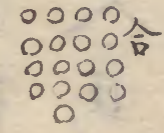
つりい 矢を持ち 矢ハ彩ノ羽ニキルニ六人  
了にい 矢所司都合九人并に馬割尚  
塗師ともお相成に下り同所にて神所  
をいふ、きふのあに立ちいひ其  
時馬お尚神を牽来り同所南の方ふ  
七尺の的をかけお鬼板をうく鬼板  
ハ一尺四方の板表ハ星裡に鬼文字西  
端にハ半辨月日を書せしおていさ  
て一人的のあにす、こより白木弓に

て鬼板を射割り繋る六人三年にあ  
れ射あ一輪遠を下し 輪遠ハ土上に鏝  
並きき並き友人輪遠の中を四り遠へ  
中に立て 輪遠の二つの輪乃 七尺の的  
をおい二番三番も同り仕り射終りて  
射手七人馬お尚一金子百疋を賜り里  
中り附の白星と黒星に塗り神あに供  
へい金の代りも捨り命にて 世二役二  
人の所司おたあるむゆる決りてお殿

の階を升りい時神子神系を奏一所司  
ハ神あいて神酒をい、き退き

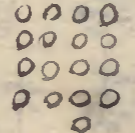
吉備津宮正月七日御歩射手御人数

一番



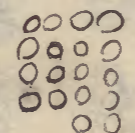
支配代  
大田近

二番



有本  
尾佐

三番



坊尾  
堀

右任先例ノ日可被勤者也

仍如件

侍所司

寛永十二年

廿三日ぐり廿四日また草戸村愛宕社  
に火防祈禱あり小き笹粽を賣り以て  
糸い人買取り以五九兩月准い以升  
四日牛馬の神として服部永谷大仙宮へ  
牛馬を引て多く糸い荒神と申す小  
神相村くにもく多き村にも十六七  
枚五つ六つを有し其を傍に組合の産  
以て正五九月小荒神禱と申すを仕以  
或ハ十人亦人走組と申す寄合ひ神酒

を戴きいかに高きあり或は所をこて前  
仕い山お村と申ハ概に隙をとり蓋に  
空豆の塩よて煮たるをつけ大こんに  
菰藷をまゝ一ハ汁を付て外も色く  
煮倒るゝい他の村々大抵ハ臨時の有  
りて馳走とも仕いも山産の多く廿八  
日を定め仕いへとも定日也紅或は  
毎月仕い組も間々には内坐の部此  
月多くハ家祈禱を仕いて社人修験或

ハ僧をお招きし申五月九月も同所とい  
此月佛事あり申廿三夜待と申に山伏或  
そ寺へ集り棋系或或ハかるゝ等の事  
も仕い浄土宗は忌十九日あり祝新仕  
い余請人の甚いかふも二事と申に奉  
納養お養ふるに申申神村と申に  
ハ祖先の忌日毎年以月のを初月忌と  
稱し僧をまねきしりあり或ハ村に  
たり月あり十二日題目講亦日大降講

浄土に八日門徒宗廿七日念佛講を  
も仕い

此月を好之用ゐ又忌遊る事  
此月十五  
日迄の内ハ佛多ふ不仕年忌法事も去  
年十一月阿もり一とりこしハ一た又  
兄の死して年教もくるきハ魚も  
又神を祭いする多ハ獣肉を菜喰ると  
に仕い者も幸意仕い  
二月

朔日大抵節句の如く一日正月と唱  
一て餅つき祝ひハ方言一日をひて  
いどハハ是日の物節羹一緒と  
雑煮もせちも一度にそるハ  
ちハ米と神を飯と一土器小たか  
とりハて年の神宮系にて  
高小成くりハ高きに福を  
つとハハ年祝の容今日を  
ハ後小ハハは日奴婢代り八月

も同子大抵前月亦三日に辭去り今  
日躬参あり農家ハ十二月と八月  
にかさういひいてい正月の教傳後訛  
の詞多くハそまゝに記し申ひて  
い又一ていとも夢へ申ひ  
二日小灸治仕ひ八月も同子といひ  
八月おことけい子此名同尚地にてハ  
不逢ひ

初午稻荷祭あり間々所産ハ一尺卯祭

ほと賑ひ不申ひ塩漬に餅つき或ハ杞  
ときお仕へ酒へ一濱の社へ供へ近隣  
祝教へも送ひ是を給ひハ甚やえを  
せぬと申ひ是を名つきておとく申ひ  
子供を習始い子寺入ハ新舊ともに正  
月十一日に仕ひそ外もいつにても持  
手次第にて今日に限らぬ子ハ承り不  
申ひ

百子講と申ひ六とするをち荒神講

ふしへ大必二月十三日に仕ひし頃  
申村と申ふを氏子寄合ひ鬼面を畫き  
的に仕り弓を射りて眼に阿ふれを  
凡豊年と申ふ尤高書阿りて酒を設け  
平外荒神へも第に凡弓を百手射りて奉  
納仕ひより此名をいふよしにひへ  
亦或ハ弓ハ射りぬのこにて糸詭  
のくに海いたるうせぬもぬいぬ多  
くハ百手溝と申名目計こて何に

至て此名目以産い哉不存るがら集  
り酒宴ると仕ひる諸村大持同以い  
き上山田と申にハ氏神住吉社とて此  
弓と稱し氏子の者初いを決ハ初か  
る不やい此日王番神を祭り醜を  
つくりぬもろし玉番神ハ馬を守る  
神の由申つてハ黄幡とも玉馬とも  
かきい

彼岸寺ニ村もひくに法談讀經流灌頂



施餼鬼等の事此處の俗家にてハ園子  
等の供物仕り親類なるとも甚し  
別子不承の雨木と中村にハ彼岸ハ佛  
縁深しとて他月の法事此以に仕  
家も此處の  
十五日涅槃會の事  
其言宗結衆六七箇  
寺或ハ八九箇寺にて輪當に像を掛け  
おより誦經仕の故當當の寺へ家詣多  
く門前に湯菓子等の賣物もおし  
此處

に此處の解寺も毎年像を懸の之に  
て家詣も少く俗家にてハ何事も  
く或ハ正月に切らるあつれを賣り  
るへ物にいし  
市中ハ此日紙鳶を野外へ持ち  
けや  
氏宮にて流鏑馬仕の村も  
此處

社日  
近來備中に仕の故接近の  
村にも  
往來の路例に五角なる

木をこて子の方に天照太神寅卯に大  
已貴神已に少彦名命未申に埴姫命  
成に倉稻魂命五神を書し井をたて注  
連を引ふ穀をそるへ社稷を祀りしる  
秋社も同振るる村中平日休息仕い  
何字村と申に出とたふと申て組合を  
定め家を定いりたると組の人集りたると  
の神と申へ赤豆飯酒ると供へ人とも  
たへ申いこれをおふと申又二月たると

とも申い或ハ一家限うと仕いもあこ多  
くハ五人七人會しうさん蕎麦酒ると  
にて雑談仕りおかれいたとの神ハ社  
園とも申昔ハ仕りしるにいせ今  
日つぎ木を仕いへちよく活しいし  
申傳へい

此月神より一之宮に高月節日より三月  
三日を舞樂執り見の舞と申りるこ十  
三日鉾うけ廿一日大鼓うけと申る

此座の此外餘の寺社費年を祈ひる百  
姓多うい程の事ハ云々此坐の

佛子に二月會といふ事も不違い涅槃彼

卷の外農暇を目阿て不仕い説法る

ハまゝ、此坐の式ハ涅槃するを二月

會なる也とも尸い

此月婿系二の字れ字畫にて離ひるを忌

いよ十八月も同一子に以外に好み忌

ふいり不違い

此月初に塩漬ふる始と申ことあり

働人より集り餅をつき先づつ何茶

して丸餅月の穀とてぬ神酒并に着着

餅等もす敷ふ阿そせ塩竈の産根に供

成へいそれる烏来うておく喰いを吉

又此とす喰えされハ又餅をつきか

いてても烏来ふされハ必悪くお来い

とて恐れい酒宴かいつてその餅を

たのくころ場り隣近ハたくりい是

ちも事とやい

三月

三日雛祭いする人形ハ内裡雛紙雛武者  
人形何方も同るにハ裁這子人形と申  
て二歳計のもうたを外の雛より大に  
仕ハ裸にハ胡着抱ハ家々に製ナキせ  
ハ竹抱ハ菱餅文蛤の外を合の品にて  
多魚の形ハ菓子等求ゆる事ハ生ハ菱  
餅にハ青豆粉に抽の葉をひきま

て糍ハ餅ハ今もきののこしてはハ草  
をも用ゐるハ桃柳を家々の軒にあきそ  
ハハ城下にハ雛荒ハハ中臺男打寄  
り家ハハ桑ハ菓子杯給荒ハハハハハ  
産ハ塩漬ハハ家ハハハハハハハハハ  
一日産に定めしる人ハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
もハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
城下にハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

教しよてやい

おにふさる 此名同通う及ふ中い一と  
も種蒔い時寺社の牛玉を水口にたて  
或ハ柳の枝茅るとをうて糲米或ハほ  
をそるへいものもゆ産い或ハ苗一種  
つゝの産うてふ二本つゝたて、志る  
しと一を眉毛ととるへかの牛玉と  
一緒に酒米をと供へい知もあういひ  
めくひとやて野蕎麥の枝三処に立て

それによき米をさふしつゝをききあ  
に焼とやい村もゆ産いこれ等おに祭  
の類にゆ産い哉方言に樹刺をくひと  
やい牛玉ハ牛玉とや字を板にすふ板  
るに赤き大印ると押いりの寺修強る  
とありおんハ村しきいにて何とも志  
れあやいもつ生いりし氏神のきれふ  
て生おとや字の籠合はいあのとやい  
傳中にハ吉備大臣の自筆ありと申つ

しへいに何れも生土とよめられの  
板橋産いせいの苗代たるいさとも右同様に法産い苗代  
に八年法板にたす一帯を必畔おたす  
ゆて法連ふ引ふりひひもたすもえ  
種の子いを臺子に來り是ひい何  
いへ又編米よ木て祭神もそるへ迄  
隣一も婿りい  
此月神子 三日一宮子無言舞とす

あり見四人侍僧の男子をか一其よ  
ふ侍僧並子見社壇の前子立不語ひ  
お殿おて神子仕いこの時樂所おり太  
鼓をうちおしい一見侍僧樂所お入  
り樂人鉦太鼓をおち見四人舞臺へ出  
て二段の舞い堂い是を四人舞とすい  
終て樂所へ入り太刀を佩き鉦をもち  
四人おて一段舞て三人ハ里舞る一人  
又一段を舞いこれを一ふの舞とす

此舞終て樂而一いりまゝ一人おて舞  
ゆこれをして三とふの舞と一いりまゝを  
て入り又一人おて舞ゆ是を二とふの  
舞と一いりまゝを地と指し終ていり又一人お  
て舞ゆ此これをも一とふの舞と一  
いりまゝ 太平樂と申し終て樂所にいり  
同所にて神酒をいりまゝ退お仕ゆ  
時吹つけ松といふおて送りの太鼓を  
うりまゝをいりまゝをいりまゝ昔も

のいひし児を天物つりて松山  
いりまゝ此名ゆなゆよりいり松  
只今ハ言ゆなゆいり赤装束赤袴波の  
模換何るを着し天冠言まゆよて鐵簪  
齒にゆ八日九日十日八講序は乃ゆ神  
供お殿おて供へこれをゆ山とまゆ十  
日五日に社傍所目内陣へ出て神お  
りゆ終ていりまゝ七度半仗をたて國  
終り初め供僧まゆなるといりまゝお

殿へ出て紙切の壇につきハ講縁起を  
誦之り列ハ大床の前に五並ひ振度小  
飾り垂るる諸器を捧つて西人よりそ  
れくおあさし右に列舞臺のあ一祿  
うおしハ時樂所より鉦太鼓をおちり  
列の羯鼓おあさ南より本社を廻る  
る三つひ元のあ立るる各の持  
る拍を渡しハ時のぬく交とるるお殿  
おちさりハ此時石司ハ神度まのはり

供僧ハ観音堂へゆき神前おて拍子木  
をおちり神子神樂を奏し終り申し三日  
より十五日までを祭礼と申して申樂  
相撲芝居等ありハるもハ産ハ一或只  
今ハ寒くハハハ 十三日より十五日迄  
護国社祭り祭神ハ主夜神と申し官  
ハ福山にきハ管内六部一日二部つハ  
祭詣仕ハ浄土宗勅請仕ハ神おハごこ  
くのとるハふよりハハ五穀の種を祭



訪の人中更に尤也来ハ福引の圖を  
らて農具縁手道具の款を  
廿三日より聴敏大明神祭り祭神ハ福  
山城開基水野日向守君廿五日生るに  
て所産の生此公の子諸軍書簿翰譜未  
に委しく此比八幡宮社地にて支日  
祓能仕に 十三日に上津領村と  
組ておより漁る一戸にこれハ二月百  
手講の録に載これに十三の講と

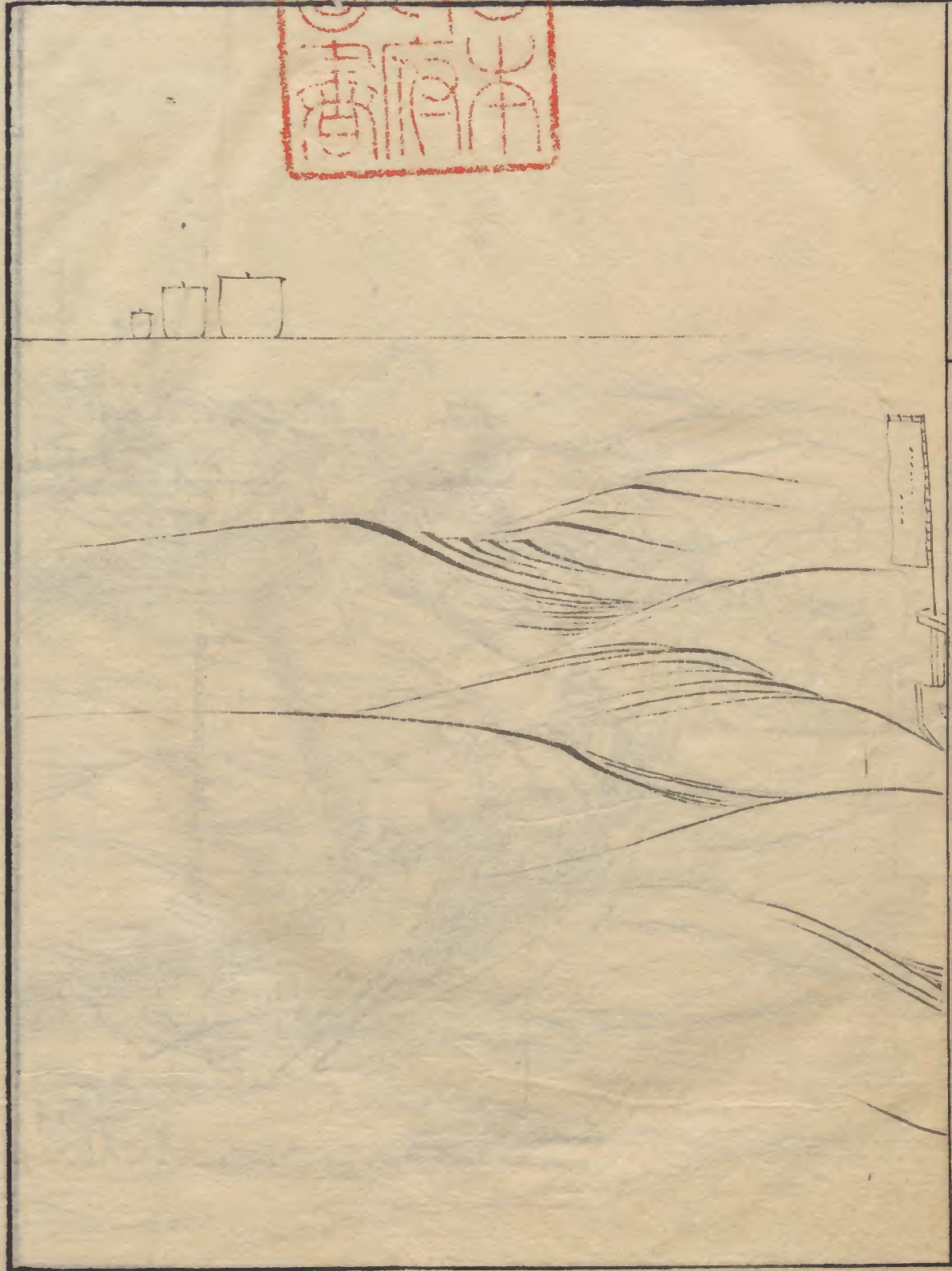
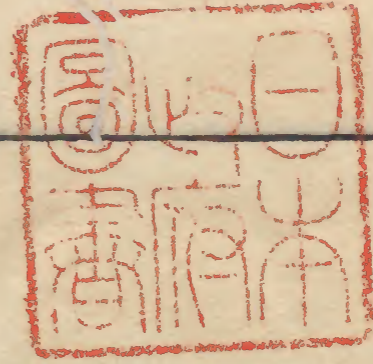
ハ廿一日告言宗以影供その本寺  
ハ僧集りて誦經をし糸講も此堂に  
手城と戸にハ廿五日を蓮如の忌日  
とて餅團子等仕によりに  
此月忌好し承り不戸に  
此月鯛の魚子を産に外海ハ波阿  
るくハ破諸ふより皆瀬戸内に集り  
ハとて如く網にてとう是を朝阿之  
と戸にその尺おの人傍近より集り

網舟一泊を送りて一ハ網を以て報  
 ひい此時帝を真嶋とり一餘の真も  
 多くい此時村く家く網の身を贈ふ  
 故と骨を潮煮ふ鞋とつふ真をさし  
 之に仕り奴婢及び近隣の人を振舞  
 い招りれい人ハ必田植の手つしひ  
 小糸いこれを取贈とすい或ハ四月  
 に吉日をえふび同一馳走を仕り此  
 時苗三把に酒膳左と供へい如も此

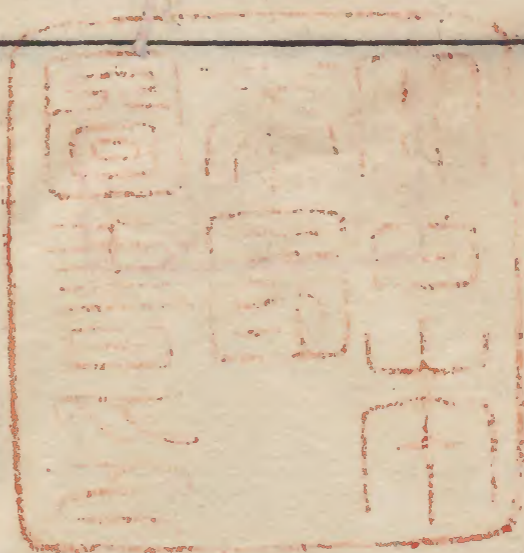
田嶋網舟の図







座山ニ礼も春繪と称しや也



明治二十九年三月一日  
東京府立図書館蔵

